10号館改装

5号館及び10号館別館が改装されたことはご存知だろうか。昨年11月から工事が行われ、今年の2月に終わった大規模な改装だ。改装は5号館の1階から始まり、10号館別館の部室、5号館地下3階の順に行われ、この工事により5号館の会議室は薬品貯蔵庫と薬品分配室、地下3階のゼミ室は部室になった。さらに10号館別館の部室があったところはゼミ室兼会議室、ガスボンベの貯蔵庫、廃液保管庫、研究室になった。

この話は元々昨年の4月、ガスボンベの貯蔵庫を増設する話を化学系学科が大学に申請したことから始まった。というのもひとつの建物に保管することのできるガスボンベの本数は決まっており、法令順守の観点を考慮しつつ、その貯蔵庫を10号館に造ることになり、ここで薬品貯蔵庫も同時期に造ることになったのである。

化学は薬品を扱う学問であり、また各研究室に貯蔵できる薬品量は法律で決められている。しかし、本学は学生数が多いため1回の実験で使用する量が多く、そのため実験をするのに苦労する場面もある。卒研生や院生の人達には薬品が不足することなくスムーズに実験を行えるような環境を整えておきたいので、薬品が無くなってから頼むのではなく、ストックを用意しておく必要があった。しかし、薬品の貯蔵はガスボンベの貯蔵よりも規制が厳しく、貯蔵できる薬品の量はもちろんのこと、貯蔵する部屋にも規制がある。もし薬品が爆発したときのために防爆ドアにすること、薬品を床にこぼしてしまったときのために部屋の片隅に集まるよう床に傾斜をつけること、秤を設置すること、排気設備を付ける事などだ。また、薬品を管理する人のための部屋も必要だ。そのために5号館の会議室に抜本的な大改装を行い薬品貯蔵庫とすることになったのだ。

それにより会議室が無くなってしまうので代わりの場所が必要であり、ゼミ室兼会議室を10号館別館に移転させることになった。さらにゼミ室兼会議室が移転すると部室が無くなってしまうので、5号館地下3階の体育館横にあったゼミ室を部室にすることになった。

この新しい部室は元々の部室と同程度の床面積になるように間取りを取ってある。

また、運動部は体育館の近くに部室があった方が便利であり、元々10号館別館に部室があった部活動だけではなく移転を希望する一部の部活動も移動する可能性があるそうだ。

10号館の裏にあった廃棄物倉庫兼廃液置き場もこの改装に伴い危険物倉庫に変更し、廃棄物倉庫はそのままの場所で、廃液置き場は10号館別館に移転することになった。

今年の4月から改装後の5号館と10号館別館を学生が使うことになるので、今後さらに使い方を詰めていくそうだ。今回の改装によるデメリットとしては、ゼミ室が少し遠くなった点が挙げられるが、全体的に見るととても合理的に思える。

法令順守と合理性の観点によって行われたこの大規模な改装は、都心に位置する本学ならではのものと言えるかもしれない。

▲改装後の10号館の様子

▲取材に応じていただいた築山光一教授

在学生も知らない理科大の施設

存在する4号館

本学の建物には、1号から号までの番号が振られている。しかし改めて考えてみると、これらの棟の番号には「欠番」が存在するのではないか、という疑問が生まれてくる。本学には飯田橋駅前に1～3、6～9号館が存在するが、これ以外にも離れた場所にいくつかの校舎が存在する。5、10、11号館がそれであり、これらは学科や授業こそ限られるものの、学生によっては利用頻度が高く、広く認知されている校舎である。では、ここまでで1度も登場しなかった番号「4」を冠する棟はどこにあるのだろうか。よく「4は忌数だから欠番になっている」という話を聞くが、4号館という棟は確かに存在し本学の刊行物にも記載されているため、欠番とはなっていない。4号館は飯田橋駅前の校舎群からすこし離れたところにあり、「若宮校舎」の名で呼ばれている。この棟はどのような歴史を歩んできたのか。本学が記念刊行物として発行した冊子「工学部の歴史50年」によると、4号館の竣工は1971年のことであり、当初は理窓会館として使用されていたことが確認できる。1980年の地図には「数学科」と書かれており、過去には数学系研究室が存在していたことも分かった。しかしその後の1981年以降の地図には「若宮校舎」としか書かれておらず、用途は不明となっている。2002年の地図には「防災倉庫」の文字が確認でき、本学が学生ならびに地域住民のために防災用品を備蓄している。4号館へは筆者も何度か入ってみようと試みたものの、門扉が閉ざされており入ることはできかった。本棟に入ったことがあるという学生は本学でも相当まれであると言える。

▲4号館(若宮校舎)の様子

屋上に謎の神社？「落第神社」

今は亡き本学旧1号館の屋上にはその昔「落第神社」と呼ばれる不思議な社があったという。この「落第神社」という名前は「ここへ参拝すれば留年しない」という迷信から、学生たちが自主的にそう呼び始めたのだそうだ。旧1号館は1931年竣工であるというからこの落第神社は比較的新しい社だったが、一体どのような経緯で、なぜ屋上というおかしな場所に建てられたのであろうか。実はこの社、正式には神社ではなく、正しくは「奉安殿」と呼ばれるものであった。奉安殿とはかつて日本中の小中学校に設置された、昭和天皇の写真（御真影）を保管するために作られた小さな建物のことである。その目的から、小さな建物とはいえ荘厳に建てられたのだという。しかし、戦後にはその存在意義を失ってしまい、この建物について知る者も減っていったのであろう。そのために奉安殿の本来の目的を忘れ去られ、いつしか「参拝すれば留年しなくなる神社」に変わっていったと推測される。なお、野田キャンパス内には「合格神社」が存在する。神楽坂の「落第神社」と対比される存在だったが、奇しくも合格神社設置の年に旧1号館が取り壊されている。落第神社は忘れ去られてしまったようだが、合格神社が末永く愛されていくことを願ってやまない。

論説

ソチ五輪を終えて　東京五輪の行方は

数々の名場面を生んだ今年の冬季オリンピックも無事終了し、早くも次回のオリンピックの開催を楽しみにされている方も多いだろう。その他、2020年にはここ東京においても夏季オリンピックが開催されることが決定するなど、何かとオリンピックの話題が絶えない。

1964年、日本で初めてのオリンピックが開催されたのも、同じくここ東京であった。この際には国家の威信をかけ、首都高速道路や東海道新幹線など大規模なインフラの整備が行われ、その後の経済発展の支えとなった。あれから50年が経過した現在、国内はあのころに比べて様々な面において格段に良くなったことだろう。しかし一方で、あの時代程の急激な成長は望めなくなってきたのも確かである。

首都高速道路は老朽化が目立ち始めてきているが、交通量が多いため抜本的な対策を打てないでいる。また予算の不足も背景にあるとみられる。一方でモノレールや地下鉄などに積極的な投資を行おうとする動きもみられ始めた。東京駅直下、それもおよそ地下40メートル以下の「大深度地下」と呼ばれる空間に新線を建設した上で、新駅を開業させ、成田空港～羽田空港間を短縮させようという計画を打ち出したのである。これにより都内交通の中心地である東京駅への移動時間を短縮し、より外国人観光客が訪れやすい環境を作ろうとしている。このように、東京では様々な大規模事業が動き出してはいる。未だ計画段階に留まっている物も多いが、これらはまだ東京が活力を失っていないという証拠であろう。だが一方で、前述の通りインフラを維持することが難しくなってきているのもまた、事実である。「造る」ことだけでなく「維持する」ことも考えていかなければならない。今までの政策では通用しなくなってきた現在、投資の方向性にも転換が必要だと筆者は考える。

交通網だけではない。メインスタジアムである国立競技場も今年から改築が行われる。約1800億円に上る総工費は都の積立金や国家が負担するなどして賄うとしている。しかし「東京都民はオリンピックの受益者である」とし、都税で建設費の一部を追加負担するべきだとする意見もある。つまり、都民はオリンピックの恩恵を最も受ける分、負担も人一倍すべきだということだ。今回のオリンピックは「コンパクト」を最大の長所としてプレゼンテーションを行った。しかし一方で他県民が疎外感を感じているようにも思われ、ゆえにこのような意見が出ているのではないだろうかと筆者は考えている。都民、そして本学に通学する学生は一人ひとりが「オリンピックの開催者」という自覚を持ち、その動きに目を凝らす必要があるだろう。例えば築地市場移転についても同様の事が言える。移転先である豊洲の埋立地は、過去に東京ガスの工場が所在した関係で土壌汚染が激しいとされ、土壌の浄化作業が行われた。移転後の市場跡地は選手村として利用されるため、オリンピックと非常に密接な関連をもっている。都はオリンピック開催に向け移転を急いでいるが、市場関係者からの意見を十分に組み取れているとは言えないだろう。オリンピックをただ「お祭り」として見ているだけでは不十分であり、その背景でどのような活動が行われているのかということに対しても、我々は注視していく必要があるだろう。

一般にオリンピックは経済成長の起爆剤とされている。国内経済が豊富な投資により活性化するためであり、過去日本がオリンピック景気により一躍成長を遂げたことがその証左であるとされる。しかし残念ながらインフラへの大規模な投資には限界が近付いている。すでに日本はさまざまなインフラや設備に対し投資を行っており、成長は鈍くなりつつあるためだ。それどころか、過去の投資が大量の「負債」にさえなって返ってきており、技術の発展などだけでなくそう言った意味でも、前回のオリンピックとは全く異なっているのだ。つまり、これからはそういった投資だけで生きていくのは実質不可能である。ならば、今までに無かったような革新的な分野に切り込んでいく必要がある。例えば、地震に対する防災や、再生可能エネルギーの普及促進などである。十分な余地を残す、投資の必要な分野というものはまだまだ存在している。「真に必要な投資は何か」という問いに対しても、都民のみならず国民全員がこの機会に考えていくべきだろう。

「東京オリンピックは負債を残すだけの大会であり、開催すること自体が無駄である」という意見も散見されるが、筆者はそうは思わない。現在、国内経済がさほど活発ではないのは認めるが、だからこそ「成長の起爆剤」に未来を託す必要があるだろう。このままずるずるとまっていては衰退を待つのみだが、歩みだせば良い未来を見つけることが出来るかもしれない。